

サンチャゴ日本人学校における良好なメンタルヘルスに関する一考察

前サンチャゴ日本人学校 教諭

千葉県八街市立八街中央中学校 教諭 榊原 岳

キーワード：チリ地震，異文化ショック，メンタルヘルス，異学年交流，協同学習

1. はじめに

本校は、チリ共和国首都サンチャゴの閑静な高級住宅街に位置する、全校生徒40人弱（平成24年度現在）の小規模校である。チリ国内では唯一、日本の学習指導要領に基づき教育のなされている教育機関であり、また邦人コミュニティにとっては公民館的要素も併せもつなど、首都サンチャゴに暮らす日本人にとっては欠くことのできない重要な場所となっている。

児童生徒のほとんどは、日本語を母語とする大使館職員や企業駐在員の子どもたちで構成されるが、中にはスペイン語を母語とし、日本語理解が困難な児童生徒も存在する。それらの児童生徒が含まれる授業形態のあり方や、日常の行事指導などには、様々な工夫や忍耐を必要としたが、学校全体の雰囲気としては、明るく、子どもたちの笑顔の絶えない素晴らしい学校であった。

この学校に勤務した3年間の中で、最も痛切に感じたことは、「この児童生徒の良好なメンタルヘルスの源はいったい何なのであろうか」という素朴な疑問である。本稿では、それらに関して考察してみたい。

2. チリ地震を経験して

2010年2月27日土曜日、現地時間6時34分に発生したチリ地震は、サンチャゴ日本人学校（以下、本校）にもいくつか爪痕を残した。図書室の本棚は全て倒壊し、講堂の天井には大きな穴がいくつか開いている状態であった。しかし、幸いにして本校児童生徒、保護者、教職員に至るまで大きな怪我はおらず、月曜日には全員が無事に登校し、各々の体験などを興奮気味に話す姿が見られた。一見して笑顔も多く、教員一同ほっと胸をなで下ろした。

当時、私は本校に勤務を開始し1年目を終えようとしていた頃だった。日本では数百人規模の公立中学校に十数年勤務していたこともあり、小学部1年から中学部2年まで、わずか36名のこの学校での日々は、まさにカルチャーショックの連続でもあった。日本の学校の課題である不登校、非行、いじめ、学級崩壊などの諸問題などとは無縁であり、一人一人の笑顔がはじける素晴らしい学校であった。私事だが、教職について9年目、長期研修生として大学院に派遣された私は、そこで今日的な教育の課題に対峙するため臨床心理学を学ぶ機会を得た。修了後には臨床心理士の資格を取得したが、その専門性や職能を活かすような場面は、ここでは非常に少ないことのように思われた。

しかし、阪神淡路大震災や新潟県中越地震がそうであったように、このような大地震後、しばしば体調の変化、不安や不眠といった症状を訴えてくる子どもたちが現れる場合も考えられた（同じく地震を経験した私の2才の娘は、その後2週間程度は、母親のそばを決して離れようとしなかった）。本校の子どもたちに対しては、カウンセリングやリラクゼーション法の教示など、必要とあれば心理士の有資格者として責務を果たそうと考えていたが、それは杞憂に終わった。その後もみな笑顔で学校生活を送る子どもたちを見て深く安心したのである。



地震で倒れた図書室の本棚

3. 良好なメンタルヘルスの要因として

本校に新たに転入してくる子どもたちは、「異文化ショック」を少なからずとも経験することになる。慣れない外国での生活、スペイン語が飛びかう教室、少人数学級、7時間授業など、日本の学校にはない文化がここにはある。また日本人学校は周知の通り、非常に児童生徒の出入りの激しい学校でもある。そのため年間に幾度となく友人とのお別れ会が開かれる。子どもたちはそのたびに「喪失体験」を乗り越えなければならない。考えてみれば、子どもたちのメンタルヘルスが脅かされるような場面は多いはずなのであるが、地震後の彼らの様子も含めて、一体なぜこのような良好なメンタルヘルスが保たれているのだろうか、と日々考えるようになった。

確かに、チリは「南米の優等生」とも評されるほど治安上の問題も少なく、子どもたちのメンタルヘルスや余暇の面でも、これは大変にありがたいことであった。学校から帰った子どもたちは、お互いの家を行き来したり、週末には家族ぐるみでバーベキューを行うなど、学校外でのコミュニケーションも盛んである。子どもたち同士、そして親同士の関係が密接なため、地震後もお互いに励まし合い、連絡を密にすることで情報を共有し、適切な対応をとることができていたように感じている。しかしおよそ2年間、教師兼臨床心理士として、この学校で勤務してきて思うことは、このような良好なメンタルヘルスを保っている要因は、各国の小規模日本人学校では恒常的に行われている「異学年交流」にあるのではないかと考えるようになった。

4. 異学年交流によるメンタルヘルスの向上

(1) 各種学校行事における異学年交流

日本のどの学校にも様々な生徒指導上の問題が存在しているが、それらの芽が本校においても全く存在しないわけではない。しかし、日常的な「異学年交流」がそれらの芽の多くをつみ取ってくれているように思える。例えば学年を超えて取り組む各種学校行事、授業がそれである。

運動会、独立記念祭、スキー教室、水泳教室、サマーキャンプ、修学旅行、百人一首大会など、あらゆる行事が学年の垣根を越えて企画・運営される。転入して間もない子どもたちでも、同学年や担任教員のサポートに加え、異学年の先輩、後輩が文字通り手取り足取り親切に導く姿がある。運動会シーズンともなれば、応援パフォーマンス、小学部から中学部までが平等に楽しめる競技などについて、子どもたちみんなで話し合うのである。どの子も積極的に自分の意見を述べ、お互いの意見を尊重しようとする姿勢が身につく。またサマーキャンプでは、どのような食事や催し物にするか、車座になって会議を行い、どの子も意欲的に参加できるキャンプを一から作り上げるのである。このような異学年の取り組みは、あたかもアドラー心理学に基づくクラス会議のようでもあり、グループワーク、構成的グループエンカウンターのようでもある。



乗馬体験 ～サマーキャンプにて～

(2) 授業における異学年交流

日頃の授業における特徴的な「異学年交流」として、音楽、図工、体育などの技能教科があげられる。どの技能教科も複式クラスで行われているため、学年の枠を超えた合奏・合唱や共同制作、協同演技が行われている。当然、発達段階による能力差が生じるが、学年の上の子どもたちが素晴らしいリーダーシップを発揮してくれている。教える側はそこでリーダーとしての立ち振る舞いを身につけ、自己の存在感を大きく感じる事が出来る。また教えられる側から見れば、教員からだけでなく、身近な先輩達からも顔を寄せ合わせて教えてもらう事が出来るのである。ソーシャルスキルの向上ばかりでなく、それらの事柄は、また他の子どもたちへと伝達される良い循環が出来上がっている。

(3) 遊びの中での異学年交流

一見して小さな事のようにもあるが、行間休みや昼休みなどの遊びは、「異学年交流」が行われている最も重要な時間と考えて良いと思う。平屋1階建て、中心に広い中庭を有する本校の構造は、学年を超えての遊びが非常にしやすい環境でもある。義務教育段階では、その発達傾向の違いから、たとえ同学年であっても時として話題や遊びが噛み合わない場合もある。特に本校の場合、スペイン語を母語とする子どもたちもいることから、お互いの言葉がコミュニケーションの障がいとなっている場合もある。しかし、そのような場合でも異学年で同じ環境に身を置けば、自分と話題や遊びが合う友人を見つけられるものである。正しい言い方かどうか分からないが、自分の「レベル」にあった友人と交流できるチャンスが、日本の学校と違い圧倒的に多いのである。学校生活のあらゆる場面で、自分と話せる友だちがいる、このことの大きさは計り知れない。ふと気がついて休み時間の中庭に目をやれば、学年を超えた子どもたちの輪が、自然と出来上がっている。たわいもないおしゃべりなのであろうが、このような集団あそびが子どもたちの良好なメンタルヘルスに果たす役割は大きい。

5. おわりに ～臨床心理士としての視点から～

「異学年交流」には、心理学でいうところの様々な「技法」が存在していると感じている。構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング、集団療法などがそれである。さらに少人数指導や子どもたち一人一人に対する教員の手厚いケアも加わることで、メンタルヘルスが十分になされていると感じている。幸いにして、私を知る限り、何年間も不登校児は存在しないし、いじめ、暴力等の発生件数もゼロであった。このような学校に勤務できたことに、改めて感謝すると共に、チリでの様々な教育実践が、日本の義務教育諸学校が抱える様々な問題の解決の一助になることを願っている。私自身、3年間の経験をもとに、「異学年交流」を中心とした取り組みを実践していきたいと感じている。

最近では、日本でも「学びの共同体」や「学び合い」などといった理論に基づき、協同学習に校内全体で取り組む学校が増加している。その多くは同学年、同クラスでの協同的な学習を指す場合が多いが、異学年が同じ教室で協同的に学ぶ例もあると聞く。このような動きがますます広がっていくことを願ってやまない。